

全入時代における大学入試センター試験



吉本 高志

(独立行政法人大学入試センター理事長)

一 はじめに

大学入試センター試験は、大学入学志願者の高等学校段階における基礎的な学習の達成度を判定することを主目的として、センター試験利用大学と入試センターが共同して実施しているものです。利用大学は、大学入試センター試験によって、大学入学志願者の高等学校段階における基礎学力を客観的に把握するとともに、それぞれの判断と創意工夫に基づいてセンター試験を適切に利用することにより、志願者の能力、適性を多面的に判断しています。また、センター試験の実施に当たっては、作題委員の派遣、試験会場の運営等、利用大学には、多大な御協力をいただいております。この場をお借りしまして深く感謝申し上げます。

昭和五四年度から平成元年度まで実施された共通第一次学力試験に代わり平成二年度から実施されたセンター試験は、本年一月の平成二二年度センター試験で二〇回となりますが、年々センター試験を利用する大学が増加していること、現役生の志願率が上昇していることなど、非常に重要な役割を果たしていると考えています。

一方で、少子化により大学入試を取り巻く状況は劇的に変化してきています。大学入試は、もはや一部の選抜性の強い難関大学を除き、「狭き門」とは言えなくなってきており、いわゆる「大学全入時代」を迎える中で大学での選抜方法も多様化してきています。このような中で大学入試センター試験が果たしている役割や今後の課題を述べたいと思います。

二 近年の大学入学者選抜の現状

これまでの大学入試は、大学教育を受けるために必要な学力水準を評価・判定するというよりも、入学者を選抜する機能が強く意識され、大学進学をめぐる競争が、入学者全体の学力水準を維持・向上させ、入試によって入学者の学力水準を担保することが可能でありました。

現在、大学・短期大学への進学率は五〇%を超えており、大学・短大の入学者約七七万人に対して、入学者は約六九万人であり、収容力は約九割となっています。また、入学者の選抜方法では、一般入試は約五六%に低下し、約四三%がAO入試（学力検査に偏ることなく、審査書類・面接等を組み合わせる入試）と推薦入試（高等学校長の推薦と調査書を主な資料とする入試）となっています。

そもそも、AO入試・推薦入試は、一般の学力試験によっては、見ることでできない能力や個性などを測り、基礎的・基本的な知識・技能に加えて、それを活用して課題を解決する思考力・判断力・表現力を把握する方法として拡大されてきたものです。しかし、一方で「手間のかかる」選抜方法であることから、各大学での取り組みには限界があり、必ずしも学力検査を課さない形態で普及しており、外形的・客観的な基準が乏しく、事実上の学力不問の入試が拡大するおそれが懸念されています。

このことは、選抜機能の低下をもたらし、入試によって入学者の学力水準を担保することが困難という状況から、さまざまな影響を大学、高校双方に与えています。大学においては、「大学志願者は一定の学力がある」との前提に立った入試は困難となり、このことを前提とした選抜方法の見直しが必要となっています。また、

高校においては、大学進学が比較的容易になり、大学入試を背景とした大学進学希望者の指導・学習意欲の喚起が以前にも増して困難になり、「高校で身に付けるべきことをしっかり身に付ける」ための取組みが改めて必要になっています。

いずれにしても、様々な方法で客観的に学力を把握し、それを高等学校での指導の改善や大学入試、大学初年次教育に役立てていくことを通じて学力水準の向上を図るという考え方が求められています。

三 大学入試センター試験の現状

平成二一年度センター試験の志願者数は五四三、九八〇人で、一八歳人口の減少にかかわらず、前年度から五九五人増加しました。現役志願率は四〇%を超え、過去最高となるとともに、利用大学も平成二一年度センター試験では新たに私立大学一八校が加わり、合計六三九大学（国立八二大学、公立七三大学、私立四八四大学）が利用することとなっています。これは、平成二〇年四月一日における四年制大学の約九〇%に相当します。さらに、短期大学についても新たに公立短期大学一校及び私立短期大学八校が加わり、合計一六四短期大学（公立一八短期大学、私立二四六短期大学）が利用することとなっています。年々利用大学が増加することで、大学、受験者双方にとって大学入試の幅が広がり、センター試験の重要性も増していくものと考えています。

前述のとおり、大学は独自の判断と創意工夫により、自由にセンター試験を活用して、特色ある入学者選抜を実現することができます。センター試験で出題する六教科二八科目から大学の判断により利用する教科・科目を自由に指定することができます。センター試験と調査書や面接、小論文、実技検査などを適切に組み合わせることで、大学のカラーを鮮明に打ち出すことができます。

実際、センター試験を利用することで、小論文、面接等を実施する大学や、推薦入学、帰国子女・社会人を対象とした特別選抜を実施する大学が増えつつあり、AO入試や推薦入試にセンター試験を用いる例もあまり

す。大学での利用方法の例を挙げると次のようなものがあります。

- ・ 基礎的な学力を幅広く評価するため、出題教科・科目を総合的に利用。
 - ・ 調査書とセンター試験で第一次の選抜を行い、その合格者について面接試験を実施。
 - ・ 入学定員の一部について、センター試験と大学が行う試験のうち、高得点の方を可否の判定に使用。
 - ・ 推薦入学について、センター試験の国語・外国語のみを利用し、大学が行う試験として面接を実施。
 - ・ センター試験で必要とする成績水準を明示した上で、センター試験の成績がその水準に達している者は大学が行う試験に進ませ、センター試験の成績は合算せずに大学が行う試験の成績のみで可否を判定。
 - ・ 大学の自主的な判断に基づき、前年度のセンター試験の成績を当該年度の入学選抜に利用。
- このように、大学がセンター試験を様々な形で利用しており、センター試験は大学入試の個性化、多様化に貢献していると考えられます。今後、各大学においては、アドミッションポリシー（入学選抜方針）を明確にし、大学が求める基礎学力を的確に把握することが求められています。

四 大学入試センター研究開発部における主な調査研究

大学入試センターは我が国の入試研究の中核を担う機関であり、センター試験及び各大学の入学選抜方法の改善に資するための研究を行う研究開発部が設置されています。研究開発部では、試験の制度や問題作成・実施に係る研究、試験問題の分析・評価及び試験問題・評価方法のデータベース化、さらに、総合的な試験、各種の適性試験、高大接続等に係る研究、社会の要望調査等、幅広い研究を行っています。平成二十一年一月一日現在一五名の教員が在職しておりますが、これらの入試に関わる研究を行うためには、特定の専門分野にとらわれない横断的な研究活動が必要であり、統計学や情報工学のみならず、社会学等の多様な専門分野の研究で構成されています。

研究開発部における調査研究では様々な成果が挙げられていますが、その中でセンター試験の改善に大きく

寄与したものを紹介します。

【センター試験問題データベースの構築、統計情報の蓄積と利用】

共通第一次学力試験及びセンター試験で過去に出題された全科目について、データの整備・統計情報の計算・データベースの構築・インターフェイスの開発を行い、それらの情報を問題作成部会が利用できるようにしており、問題の難易度、識別度など、問題作成の上で大いに役立っています。

【リスニングテストの機器改善、実施方法に関わる研究】

リスニングテストは平成一八年度センター試験から導入されましたが、個別音源を利用した試験という世界でも例のない試験であったため、導入当初は多少の混乱をきたしました。研究開発部では、英語リスニングテストの実施方法や個別音源機器の管理保守及び音声信号処理方法の開発、各種騒音による影響などの調査研究を実施しており、航空機騒音の測定調査の解析結果等に基づく機器の改良や、音質改善に向けて音響スタジオ用 plug-in (WAVES) の新規導入、帯域制限による適応的ビット割当てを利用した音質改善等により、年々改善が進められました。三回目の実施となった平成二〇年度センター試験では大きな混乱もなく実施することができました。

【障害のある受験者をはじめ全ての受験生に公平な試験を実施するための、テストのユニバーサル・デザイン】

センター試験では、従来から点字問題冊子を作成するなど、障害のある受験者のために、様々な配慮を行ってきました。

その一環として、研究開発部では、障害受験者に対する公正かつ適切な試験時間延長率の推定法を開発し、点字問題冊子使用の重度視覚障害受験者及び拡大文字問題冊子等使用の弱視受験者に対するセンター試験の試験時間延長措置の根拠を定量的に明らかにしました。この研究成果を応用し、弱視受験者に対する司法試験の

短答式試験の憲法・民法・刑法の三科目総合の試験時間延長率が健常受験者の一・五倍に見直されるなど、視覚障害者に対する機会の平等に寄与しています。また、視覚障害受験者に対する点字問題の点字記号体系の改善に関する研究では、現行の日本語の仮名点字記号と、世界標準の英語点字記号の数式や化学式等の表記法を統合し、統一日本語点字記号体系が作成されました。この研究の中心となった藤芳衛大学入試センター名誉教授はこれらの功績により、視覚障害者の文化や教育、福祉の向上に貢献した人に贈られる「点字毎日文化賞」を昨年一月に受賞しています。

以上、センター試験の改善に大きく寄与した研究成果を述べましたが、研究開発部が行っている調査研究は、我が国の入学者選抜の改善に貢献することが期待されています。今後、入試研究に特化した我が国唯一の研究機関として、センター試験のみならず、各大学の入学者選抜にも寄与できるよう、研究成果の積極的な発信に努めていきたいと考えています。

五 大学入試センター試験の課題

センター試験は、これまでも様々な改善・改革を行ってきましたが、現在抱えている課題のうち、次の点について述べさせていただきます。

まず、良質な試験問題を維持することです。

センター試験の試験問題は、高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校の教科書の内容に沿い、毎年五〇万人を超す受験者の高等学校段階の学習の達成度を適切に測れるような良質なものが求められています。平成二〇年度センター試験の試験問題の内容、程度、出題方法等に関しては、全般的に学習指導要領に準拠し、高等学校の教科書の内容・範囲に基づいた良質な試験問題であるという評価が得られています。しかし、毎年膨大な入試問題が作成されている状況の下、それらとの重複を避けながら良質な問題を作成することは年々困難となってきました。その対応策として、平成二二年度センター試験から、過去の素材文や教科書に掲載された

文章であっても、高等学校における基礎的学習の達成度を測定する上で適切なものであれば、素材文として使用することもあり得るとしたところです。

また、試験問題の作成は、全国の大学等から派遣された四〇〇名を超える作題委員にお願いしていますが、その確保が年々困難になってきています。センターでは、良質な試験問題を作成しやすい環境づくりに努めていきたいと考えていますが、作題委員の派遣については、各大学の一層の御理解と御協力をお願いいたします。

二つ目はセンター試験の出題科目の選択範囲等の変更についてです。

高等学校・大学関係者からの要望を踏まえ、平成二四年度センター試験から、地理歴史・公民における科目選択及び理科における科目選択を弾力化するための試験時間割を変更するとともに、公民に四単位科目「倫理・政治・経済」を新設することとしています。試験実施の詳細については、今後検討を進めることとしています。が、関係機関に対して十分な周知を図るとともに、試験が公平・公正かつ円滑に実施できるよう万全な体制で臨むこととしています。

六 おわりに

大学全入時代を迎えて、センター試験を取り巻く状況は、劇的に変化しつつあります。各大学の入学者選抜についても、今後一層多様化していくことが予想されます。

しかし、中央教育審議会の答申でも指摘されているように、いかなる入試であっても基礎学力の把握が適切に行われることが必要であり、また、各大学は、アドミッションポリシーの中で高等学校で学んできてほしい内容や水準を明示することが求められています。センター試験は、高等学校での学習の達成度を判定する上で極めて重大な役割を果たしており、今後とも一層の改善に努めていきたいと考えていますので、皆様の一層の御協力をお願いいたします。